

企画展

魅惑の 朝鮮陶磁

Museum Collection Exhibition

Enchanting Korean Ceramics



古くから日本の陶磁器に強い影響を与え、また日本人が愛好してきた朝鮮陶磁。本展覧会は、主に館蔵品によってその歴史を概観し、その魅力を見つめ直すものです。

朝鮮半島と日本列島との交流は古く、旧石器時代（約2万数千年前）には始まっていたとされます。5世紀には朝鮮半島より陶質土器の技術が日本に入り須恵器が誕生、また16・17世紀には高麗茶碗が茶人たちの人気を集め、日本から注文されるようになります。磁器の焼成技術もこの頃に朝鮮半島の陶工が九州の唐津地方にもたらしたものでした。そして近代に入ると、日本の陶磁器愛好家たちは16〜18世紀の粉青と白磁に注目し、こぞって蒐集しました。もちろん、「翡色」と呼ばれる深い灰青色が優美な12世紀の高麗青磁も忘れてはなりません。

美しさと清らかさ、そして質朴な強さを合わせ持つ朝鮮陶磁は、圧倒的な美を誇る中国の陶磁器とも、私たちの美意識が反映された日本の陶磁器とも異なる魅力を放っています。本展覧会で、魅惑的な朝鮮陶磁の世界に、あなたもひたってみませんか。

奥高麗茶碗は、九州肥前地方、現在の佐賀県唐津市周辺で焼かれた、朝鮮の高麗茶碗を写した茶碗です。

奥高麗茶碗の名称は、江戸時代後期には茶会記などの資料に見られます。大名で茶人であった松平不昧の所蔵品目録『雲州蔵帳』には、今回展示される「深山路」と称される茶碗が記されています。昭和20年代に古唐津の研究が盛んになると、奥高麗茶碗も茶の湯の世界のみならず鑑賞の世界で高い賞玩を得るようになりました。しかし、なぜ奥高麗茶碗と称されたのか、どの窯でいつ頃焼かれたのか、さらに、どのような茶碗が「奥高麗」なのかなど、謎は多く、これまで様々に論じられてきました。

展示室1の朝鮮陶磁や高麗茶碗の展示に続き、ここでは奥高麗の成立をその特徴から「唐津焼の茶の湯の茶碗」として提示することで解明を試みました。謎を解くことが出来たのか、ご覧いただければ幸いです。

特別企画

謎解き

おくこうらいちawan

奥高麗茶碗

Special Exhibit

The Mystery of The Okugōrai Tea Bowls



根津美術館
NEZUMUSEUM



2024年 2月10日(土)～3月26日(火) 日時指定予約制

根津美術館 NEZU MUSEUM <https://www.nezu-muse.or.jp>

展示室1 企画展「魅惑の朝鮮陶磁」

重要文化財

せいし れんげからくさもんじゆへい
青磁蓮華唐草文浄瓶

朝鮮・高麗時代 12世紀

根津美術館蔵

「翡色」と呼ばれる高麗時代の最高峰の青磁。清浄な水を容れるための仏具である本作は、片切彫りで精緻な蓮華唐草文があらわされた名品として知られる。



ごほんたちつる ちやわん
御本立鶴茶碗

朝鮮・朝鮮時代 17世紀

根津美術館蔵

3代将軍・徳川家光が描いた鶴の絵を下絵とし、大名・小堀遠州が釜山窯に注文したと伝わる茶碗。左の釉薬の掛け残しを土坡とし、水辺に立つ鶴に見立てる。



ふんせい ぼたん もん ずし
粉青牡丹文厨子

朝鮮・朝鮮時代 15世紀

根津美術館蔵

粉青とは白土を施し、灰釉を掛けて焼成したもの。本作は仏像などを納置するための厨子で、扉や屋根には白土を埋め込む象嵌の技法で牡丹文があらわされている。



しんしゃ ぶどうもんづぼ
辰砂葡萄文壺

朝鮮・朝鮮時代 18世紀

根津美術館蔵 秋山順一氏寄贈

朝鮮時代になると、官窯や民窯で白磁の生産が主体となった。このような丸い壺はその代表器種である。辰砂(銅を用いた顔料)による赤い葡萄が印象的な一品。

重要文化財

あおい どりやわん しぼた
青井戸茶碗 銘 柴田

朝鮮・朝鮮時代 15世紀

根津美術館蔵

朝鮮半島でつくられた茶碗を、茶の湯では高麗茶碗と愛称する。その代表とも言える井戸茶碗のなかでも、端正な姿と淡い枇杷色で名高いのが本作である。



ふんせいとうへん
粉青陶片

朝鮮・朝鮮時代 15～16世紀

根津美術館蔵

韓国・忠清南道の鷄龍山付近の窯跡で、研究者・浅川伯教が昭和初期に採集した陶片。横河民輔、東洋陶磁研究所を経て、当館の所蔵となった。

展示室2 特別企画「おくごうらいちゃわん謎解き奥高麗茶碗」

重要文化財

奥高麗茶碗 銘 三宝 さんぼう
日本・江戸時代 17世紀
和泉市久保惣記念美術館蔵

奥高麗の中でも、高麗茶碗の雰囲気（きわ）をみせない茶碗である。高台は低く作られ、際には削り目がひとまわり見られる。茶の湯の茶碗としての唐津の茶碗の完成形である。



奥高麗茶碗 銘 深山路 みやまじ
日本・江戸時代 17世紀
個人蔵

寛政年間(1789～1801)に京都三井家から雲州松平家の所有となり『雲州名物記』に記された茶碗。ゆったりとした椀形に釉が薄くかかる。



奥高麗茶碗 銘 福寿草 ふくじゅそう
日本・江戸時代 17世紀
根津美術館蔵

奥高麗の特徴的な姿で、高麗茶碗の熊川（こもがわい）を想わせるゆったりとした大振り（おほびり）の茶碗である。二重に掛けられた釉の流れに梅花皮状（かいちぎ）が入る。



奥高麗茶碗 銘 二見 ふたみ
日本・桃山～江戸時代 16～17世紀
個人蔵

「瀬戸唐津」と箱書付のある茶碗であるが、高台内側の削り方は奥高麗の特徴を備えている。椀形で釉薬は高台際まで厚く施されている。腰下には梅花皮が現れている。



奥高麗茶碗 銘 末広 すえひろ
日本・桃山～江戸時代 16～17世紀
個人蔵

「古唐津茶碗」の箱書のある茶碗は、高麗茶碗の熊川と似た姿で、高台の削り方もその特徴を持つ。高台際まで施された釉薬も熊川茶碗を意識している。



奥高麗茶碗 銘 蓬莱山 ほうらいさん
日本・江戸時代 17世紀
個人蔵

いかに茶の湯の茶碗として作られた、奥高麗としてはやや小振りの茶碗である。重ねて掛けられ、枇杷色（びわいろ）を呈する釉薬の流れが景色である。

展示室5 ひな人形と百椿図

今回は「百椿図」を雛飾りと共にお楽しみいただきます。3月3日は桃の節供とも呼ばれます。共に瑞祥木である桃と椿で春を祝います。



だいらびな
内裏雛
日本・明治時代
19世紀
根津美術館蔵
竹田恆正氏寄贈



百椿図
伝 狩野山楽筆
日本・江戸時代
17世紀
根津美術館蔵
茂木克己氏寄贈

展示室6 春の茶の湯一釣り釜一

暖かさが増す春は茶室の天井から釜をつるす「釣り釜」が好まれます。季節の茶道具約20件の取り合わせで春の訪れをお楽しみください。



うなりょうがま
雲龍釜
京都
日本・江戸時代
17世紀
根津美術館蔵

関連プログラム

講演会 「謎解き奥高麗茶碗」
日時 3月2日(土) 午後1時30分～3時
講師 西田宏子(根津美術館 顧問)
会場 根津美術館 講堂

スライド
レクチャー

日時 2月23日(金・祝)、3月15日(金)
各日とも午前11時30分～午後12時30分
展示室1・2の担当学芸員がスライドで解説
いたします。
会場 根津美術館 講堂

※いずれも当館ホームページから事前にお申し込みください。各プログラムの聴講は無料ですが入館料をお支払いください。

開催概要

展覧会名	企画展「魅惑の朝鮮陶磁」 特別企画「謎解き奥高麗茶碗」	アクセス	地下鉄銀座線・半蔵門線・千代田線(表参道) 駅下車A5 出口(階段)より徒歩8分、B4出口(階段とエスカレーター)より 徒歩10分、B3出口(エレベーターまたはエスカレーター)より 徒歩10分
主催	根津美術館	住所	〒107-0062 東京都港区南青山 6-5-1
開催期間	2024年2月10日(土)～3月26日(火)	お問合せ	TEL 03-3400-2536 (代表) https://www.nezu-muse.or.jp
開館時間	午前10時～午後5時 [入館は午後4時30分まで]	広報・取材 お問合せ	学芸部・広報課 所/村岡 TEL 03-3400-2538 e-mail: press@nezu-muse.or.jp
休館日	毎週月曜日		
入館料	オンライン日時指定予約 一般 1300円(1100円) 学生 1000円(800円) ・()内は障害者手帳提示者及び同伴者1名の料金。 中学生以下は無料。 ・当日券(一般1400円、学生1100円)も販売しております。 (ご予約の方を優先してご案内いたします。当日券の方は 少々お待ちいただくことがあります。 混雑状況によっては当日券を販売しないことがあります。) ・2024年2月6日[火]より当館ホームページで予約を 受け付けます。 ・ご予約は1グループ10名までとさせていただきます。		当館の広報制作物に関して、郵送からメール配信への切り替えをご希望の方は、根津美術館広報課はどうぞお知らせください。 (press@nezu-muse.or.jp)

次回展 特別展「国宝・燕子花図屏風 —デザイン—の日本美術—」

2024年4月13日[土]～5月12日[日]

尾形光琳の「燕子花図屏風」には日本の美術が内包するデザイン性が究極の形で現れています。絵画と工芸の親密な関係にも目配りしながら展観します。



左: 国宝 燕子花図屏風(右隻・部分) 尾形光琳筆 日本・江戸時代 18世紀
右: 誰か袖図屏風(右隻・部分) 日本・江戸時代 17世紀
いずれも根津美術館蔵

*本資料掲載の内容は、予告なく変更になる場合がございます。最新の情報は当館広報課へお問い合わせください。(2023.12)